

原田博史¹⁾，桃崎征也²⁾

(市立堺病院 病理診断科¹⁾，国立病院機構 九州医療センター 病理部²⁾)

【症例】68歳、女性

【病歴】2006年耳下部の徐々に増大する腫瘍を訴え、近医より地域の総合病院へ紹介。耳下腺腫瘍の診断のもと、耳下腺摘出術を受けた。術後再発や転移の兆候は現在まで認められない。

【病理所見】

病変は最大断面にて長径約3cm。肉眼上内部には血性内容物を含む嚢胞状の空隙、周囲には明瞭な線維性被膜を有し、耳下腺組織とは明確に境されていた。

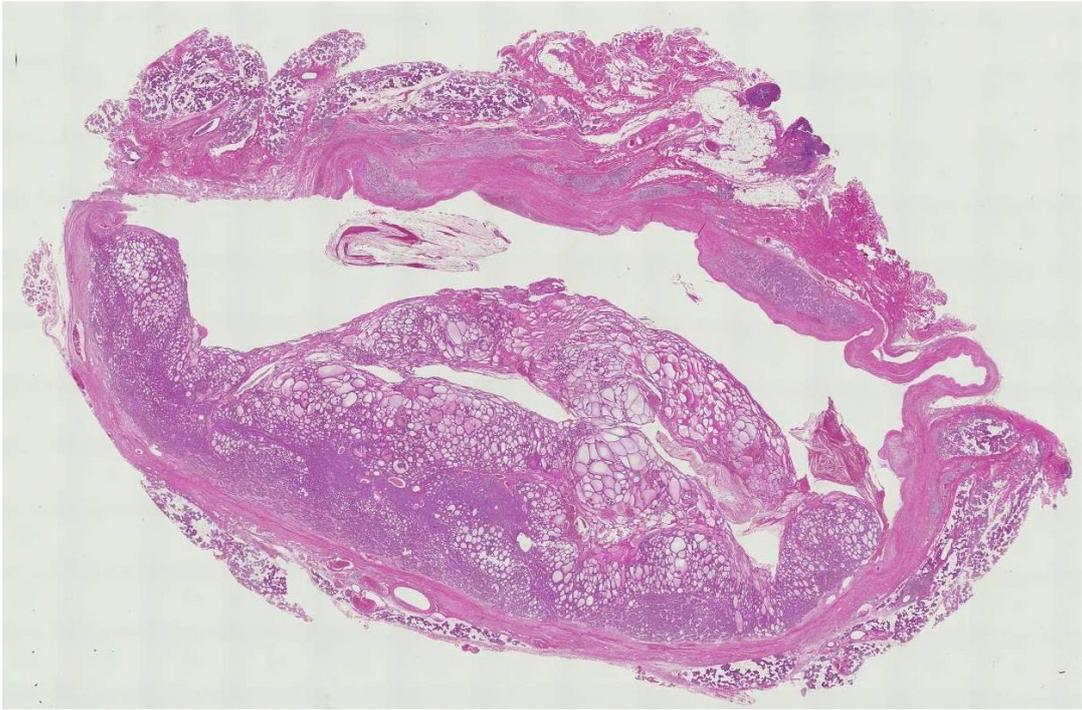
組織学的には、腫瘍は細胞質に乏しい基底細胞様細胞を主体とし、多くの部分で腺様嚢胞癌の篩状構造に類似する偽嚢胞を形成していた。他の部分では辺縁に palisading を伴う胞巣状ないし索状構造を形成し、これらの内部には好酸性粘液を容れる真の腺管構造も混在した。間質はやや疎な線維性で、その中に含まれる線維芽細胞様細胞には plump な形状を示すやや大型のものも散見された。切片上でも周囲との境界は極めて明瞭で、明らかな脈管侵襲や神経周囲浸潤は認めなかった。

【配布標本】耳下腺摘出標本のほぼ最大断面

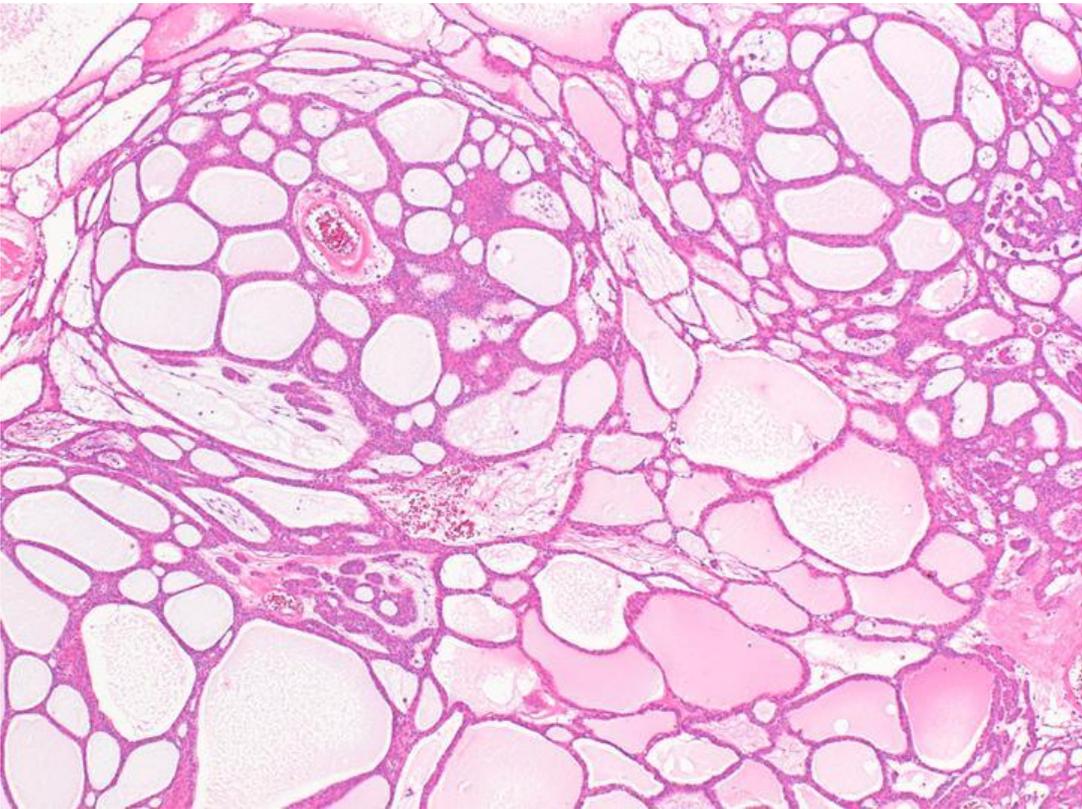
【問題点】病理組織学的診断

*本例は標本の配布はありません。悪しからずご了承下さい。

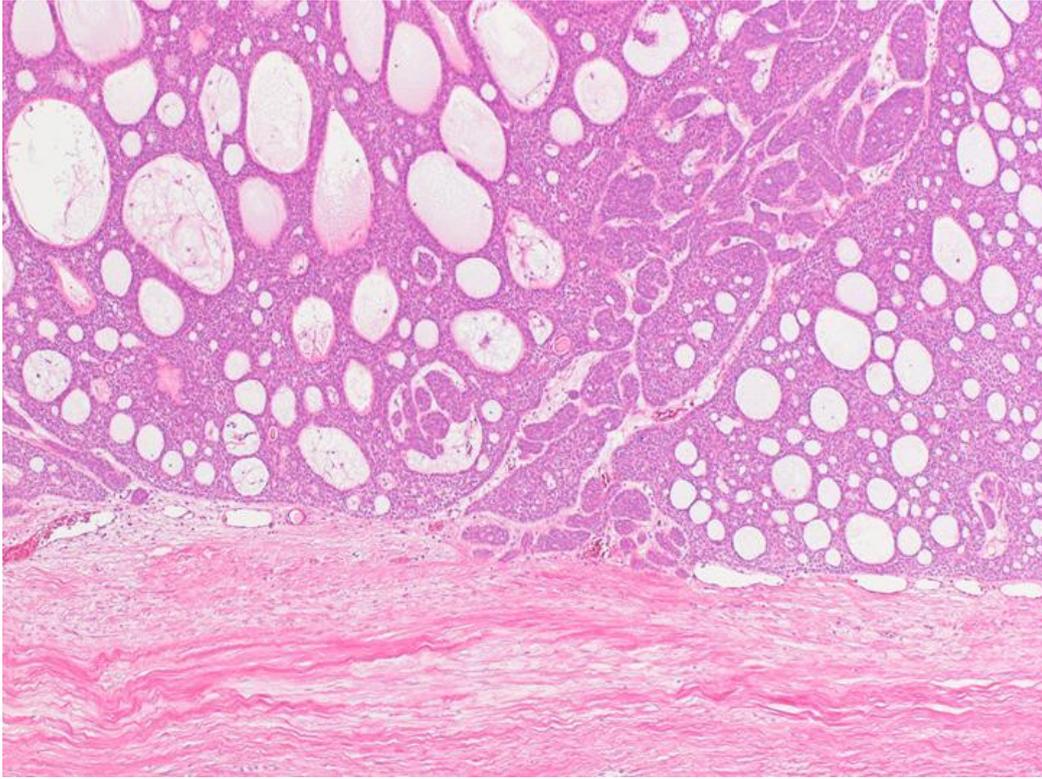
組織像については支部会HPの画像をご参照下さい。



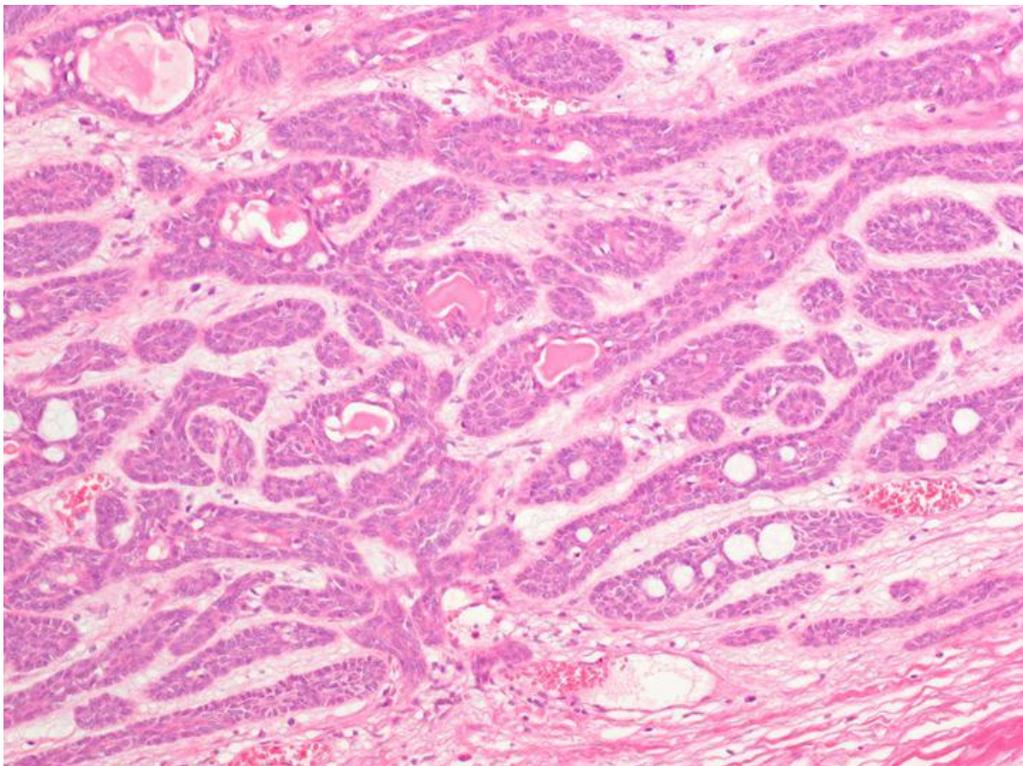
1.HE 染色（ルーペ像）



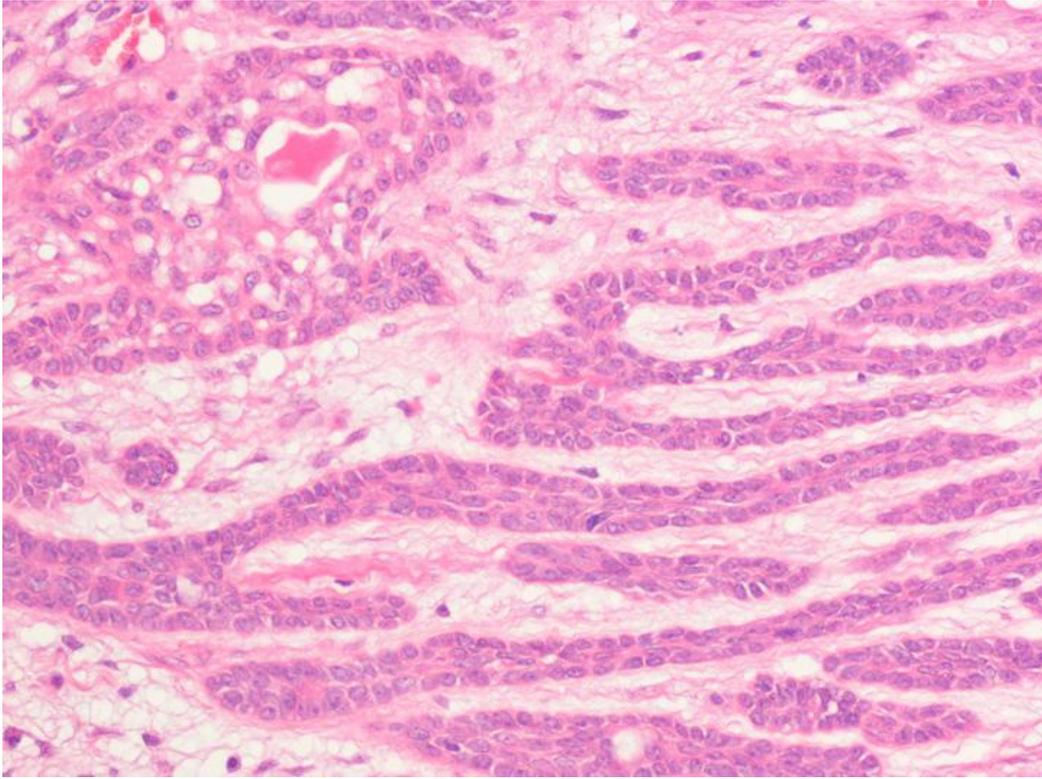
2.HE 染色（弱拡）



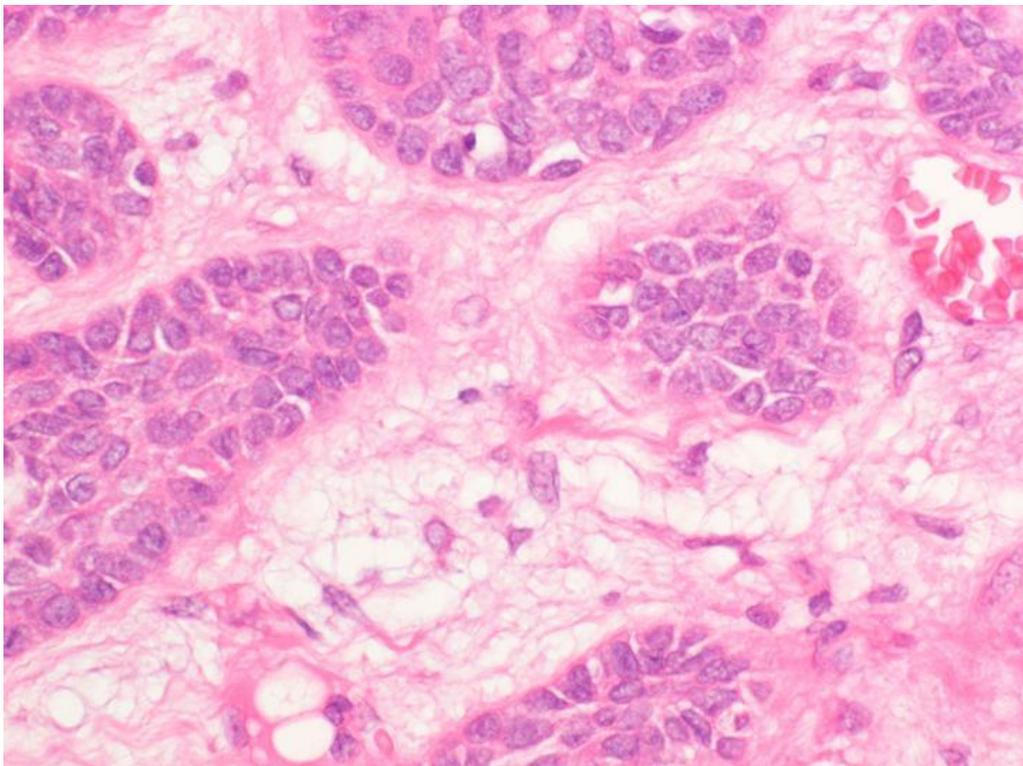
3.HE 染色 (弱拡)



4.HE 染色 (中拡)



5.HE 染色 (強拡)



6.HE 染色 (強拡)